

中国と日本の英語教科書の内容の比較研究

アダチ徹子
楊 肖力*

A Comparison of Chinese and Japanese Junior High School English Textbooks

ADACHI Tetsuko
YANG Xiaoli *

1 はじめに

近年、日本においても、中国においても、国際化の進展に対応し、英語の学習者に実践的コミュニケーション能力を身につけさせることを一層重視するため、英語教育を学校教育においてどう位置付けるかの見直しや、教育目標、教育方法、教育制度、教育設備などさまざまな領域において、改善が行われている。

中国と日本は、ネイティブ・スピーカーが少ない、英語を母語とする国々から遠く離れている、学習者が直接英語でコミュニケーションをする機会が少ない、など、いろいろな点で英語教育に制約があるという事情がよく似ている。実際に日常生活で使用する事のない言語を学習しなければならないという困難な状況において、教科書は学習者にとって最も身近で主要な英語と接する手段となる。メディアや交通手段の発達によって世界が狭くなり、以前より気軽に海外旅行に行けるようになったり、外国のテレビ番組や映画が自宅でも楽しめるようになったとは言え、やはり大多数の中学生・高校生が共通して触れる英語といえば教科書の英語であり、また、旅行をする機会もなく、外国映画に興味がない生徒でも英語に触れることができる場合は、やはり教科書しかないのである。そういう意味で、教科書が学習者に与える影響は決して小さくない。どうやって学習者のニーズを捉えて興味のある題材を選ぶかが、学習者の英語に対しての興味、理解、印象、動機付けなどに大きな影響を与えることと思われる。

そこで本研究では、英語教育の環境においてさまざまに共通点のある中国と日本の中学校の英語教科書の内容と構成を比較し、類似点と相違点を見出し、よりよい英語教科書についての検討への一歩としたい。

* 平成14年3月宮崎大学大学院教育学研究科(修士課程)教科教育専攻英語教育専修修了

2 英語教科書の題材

森住(1992)は、英語の教科書について、興味深い指摘をしている。たとえば中学生に、今日の国語に授業で何をしたかを聞くと、「『杜子春』を読んでいる」、「エコロジーの話」などという答えが返ってくるが、英語について同じ質問をすると、「現在進行形」、「関係代名詞」などという文法事項に絡めた答えか、「ゲームをした」、「自己紹介の仕方を習った」という活動に関する答えが返ってくるというのである。

他の教科でもある程度似たことが言えるかもしれない。教科で習うことは、我が国の工業生産の現状や細胞の働きについて、あるいはより良い食生活について考えるなど、「内容」がはっきりしている。しかし、英語の場合は、授業の目標は現在進行形の習得であったり、自己紹介のときに用いられる表現を知る、などであり、それらの目標を達成するために授業でどのような「内容」を扱うかは、定まっていない。極端に言えば、たとえば中学校3年間で指導要領に規定されている文法項目や表現を習得できるのであれば、教科書でどのような物語が展開されようと構わないのである。(もちろん、学習指導要領に従えば、言語や文化について考えさせるレッスンや外国に興味を持たせるような記述などを教科書に載せる配慮はしなくてはならないが。) 試みに違った会社から出版されている教科書に目を通してみると、それぞれが扱っている話題の広さに驚くであろう。そして、様々な話題に対応しなくてはならない英語教師は、広い視野と知識、あるいは好奇心が必要とされる仕事であると痛感される。

もちろん、母語と外国語とでは事情が違う。しかし、内容が主眼でない一方で、教材は、時代背景に密接に関わってもおり、悪く言えば「利用される」こともありうる。たとえば、田中(1992)は、日本の場合は、戦前・戦中の英語国との関連が悪化した時代には、英米にかかわる題材が排除され、国家主義的内容が扱われたが、戦後は一転して、英米を扱った題材一辺倒となったと指摘している。

英語の教科書でどのような内容や話題が取り扱われるかは、その時代の情勢や社会の要請と無縁ではいられない。たとえば、戦後まだ日本が戦争の痛手から完全に立ち直ってはいなかった時代に、アメリカの中産階級の豊かな生活を描いた教科書 'Jack and Betty' は、中学生に遠い国アメリカへの憧れを持たせることで英語学習の動機付けを行った。豊かになった現代日本の教科書には、外国への「憧れ」をかきたてる描写は見られない。描かれるのは、多くの外国人が訪れる国際化された日本であり、メディアを通して情報を得られるようになったアメリカだけでなく多くの外国であり、悪化している地球環境を少しでも救おうと努力する中学生たちである。つまり、生徒たちの等身大の姿である。

現在英語教科書で扱われている題材がどのようなものかを知ることが、英語教育が置かれている社会的状況を把握しておくことにつながる。そして、その分析を、対象教科書だけでなく異なる社会の教科書との比較において行くと、さらにそれぞれの教科書が反映する社会の特徴や要請が明らかになるものと期待される。

3 調査の方法

比較検討に用いた教科書は、現在中国上海地区で使われている英語教科書(9年制義務教育教材・上海外語教育出版社)と、宮崎県内で広く使われている開隆堂のSunshine(平成

13年版)である。中国では、小学校から英語が教えられているが、日本の中学校に相当する学年の教科書を分析対象とした。それぞれの教科書に含まれているレッスンのタイトルやテーマを抜き出して整理し、比較検討を行った。以下、「英語」と記述するものは中国の英語教科書のもので、*Sunshine*は日本の教科書である。

4 検討結果

4.1 教科書の構成

日本の教科書は、各学年1冊ずつで、3冊に36の「プログラム」があり、各学年ごとにサブタイトルがついている。また、各学年とも3つのパートに分かれ、それぞれ「英語学習への旅立ち」、「日本から世界へ」などのテーマを持っている(表1)。

表1 *Sunshine*のパート分けとそれぞれのテーマ

<i>Sunshine</i> 1 “Hello, Friends!”	Part I 英語学習への旅立ち Part II 日本から世界へ Part III 国際化への道
<i>Sunshine</i> 2 “Let’s Work Together”	Part I ことばと世界 Part II 人々の尊い努力 Part III さまざまな人々
<i>Sunshine</i> 3 “We’re the World”	Part I 文化と伝統 Part II 共に生きる Part III 豊かな心

中国の教科書は、各学年2冊ずつ計6冊で、全部で93の「レッスン」から成る。*Sunshine*のようなパート分けや、統一的なテーマは設定されておらず、むしろ、各学年ごとにさまざまな題材を配するような配慮が見られる。その結果、学年を通してみると非常にバラエティに富んだ題材が並び、表2に示したように、同じようなトピックが別の学年に再び登場するケースも見られる。(以下、中国の教科書は、7年級から9年級までの6冊の本をⅠ～Ⅵと呼ぶことにし、‘Book I, Lesson 1’を‘I-1’のように表記する。日本の教科書は、‘1年生, Program 1’を‘1-1’のように表記する。)

表2 中国の教科書「英語」において繰り返されるトピックの例

例1	What a Nice School It Is! (Ⅰ-13) Our School (Ⅱ-9) Schools in the U.S.A (Ⅳ-11)
例2	A Letter from Dan (Ⅱ-14) A Letter to Jane (Ⅴ-8)
例3	Our New Neighbourhood (Ⅱ-3) We are Neighbours (Ⅱ-10) We Shall Move into a Large Flat (Ⅱ-16)

4.2. 登場人物

Sunshineには、3年間を通じて登場する人物がいる。岡家の久美や健、岡家にホームステイをするEmilyなどは、1年生の早い時期に登場し、生徒はこれらの人物の体験を通して、自分も英語国での旅行や、ホームステイをするアメリカ人との会話などを擬似体験していくことになる。また、このように、登場人物の中に、留学生あるいは旅行者として必ずネイティブ・スピーカーが入っていることも、日本の教科書の特色である。

一方、中国の教科書「英語」は、レッスンごとに登場する人物が変わり、固定されていない。また、教師のMr Evansが生徒のTimの将来について母親Mrs Browneと話しているという設定など、英語国の人物らしき人々同士が会話しているものもあるが、登場人物が中国人だけという例も少なくない。たとえば、クラスメートのLi HuaとChen Meiが、Chen Meiが学校を休んだ理由について話している場面などである。中国人同士の会話は、なぜこの人たちが英語で話しているのかについての手がかりはない。むしろ、本当の会話は中国語で行われたように思われる。英語を使っている必然性についてはあまりこだわっていないようではないかと考えられる。

4.3 ワンレッスンの構成と内容

4.3.1 ワンレッスンの構成

中国の教科書「英語」は、ワンレッスンが、Text, Drills, Homeworkの3つの部分で構成されている。Textのうち、いわゆる本文にあたる部分は、7年級では中国人生徒同士の会話であることが多いが、学年が上がるにつれて、会話ではない文章体が増えてくる。7年級で70語程度、9年級の終わり頃で180語程度の読み物となる。新出単語は、本文中に赤で印刷してある。そして、本文のあとには、そのレッスンの目標文法項目を含む文である“Look at this”と、“Lesson Notes”がついている。“Lesson Notes”は、本文中のわかりにくい語句を中国語で解説したものである。

Drillは、3つから5つ程度のセクションに分かれ、1ページから2ページに渡り、かなりの分量がある。よく見られるものは、新出表現や文法事項を使ってパターンプラクティスなどを行う“Talk like this”や“Read and Say”，聞いて穴埋めをする“Listen and complete”，短めの文章を読んで英語の問いに答える内容理解の“Read and Answer”，発音上のミニマルペアに注目させる“Listen and compare”，会話のスク립トを動作とともに演じる“Read and act”などで、いろいろな種類のドリルが用意されていることがわかる。

Homeworkは、2ページから3ページ分にもわたり、かなりの分量がある。内容は、Text本文に関しての英問英答、モデルに倣ってダイアログを作成する、絵を見て説明文を英語で作成する、文章や会話文の空所を埋める、など、いろいろな種類が用意されている。

一方、日本の教科書では、基本的にワンレッスンはText（本文）とWorkshop（練習）の二つだけで、その他に教科書のあちこちに、復習や関連事項の導入としてのPop box、既習文法事項のまとめあるいは日常よく使われる会話表現の導入としてのClipboard、Miniboardなどが配され、教科書の構成に変化をもたらしている。新しい単語や文型は、ページの下部分に印刷してあるほか、巻末にもまとめてある。

また、日本の教科書には、本の最初と最初に、外国の風景や、歌、詩、文法事項のまとめ

など多くの付録教材がついている。中国の教科書には、各レッスンの終わりに、歌、なぞなど、早口言葉、ジョーク、詩などの短い付録がついているが、巻頭巻末には何もない。

4.3.2 自然現象・科学的事項に関するトピック

レッスンの数が中国の教科書は日本より2.5倍ほども多いこともあり、中国の教科書のテーマの方が内容のバラエティに富んでいるという印象を受ける。たとえば、自然現象などの科学的な内容を扱ったレッスンは、日本の教科書には、3年間を通して、“The Development of Computers”，“The Home Planet”程度しか見当たらないが、中国の教科書には、“The Moon”，“Whales Are Not Fish”，“Who Invented the Watch?”など10程度のテーマが扱われている。その他のトピックは、表3の通りである。

表3 自然現象や科学に関するトピック

「英語」	Sunshine
The Moon (Ⅱ-1)	The Development of Computers (3-3)
The Great Rivers (Ⅲ-9)	The Home Planet (3-7)
Whales Are Not Fish (Ⅱ-2)	
Space Planes (Ⅳ-9)	
Marathon (Ⅳ-14)	
Robots (Ⅰ-17)	
What Are Computers (Ⅴ-2)	
Water, Steam and Ice (Ⅵ-5)	
Who Invented the Watch (Ⅵ-7)	
The Palace Museum (Ⅵ-8)	

4.3.3 国際理解・自国理解に関するトピック

現在、中国でも日本でも、国際交流や異文化理解は英語教育の重要な側面となっている。教科書にも外国に関する題材は盛り込まれているが、その分量は、レッスン数が少ない日本の教科書の方が多くなっている。伊原(1993)は、1993年に人民教科書出版社の英語教科書を分析した際に、異文化を扱った課が3学年109課のうち9課しかなかったと報告しているが、上海外語教育出版社のこの教科書もほぼ同じ時期の1994年に初版が出版されているので、同じ傾向を持っているとも考えられる。国際理解に関するトピックについては、表4にまとめた。ただ、本文以外のDrillやHomeworkの部分に、外国の事物や人物についての文章があるので、生徒が触れる異文化は、実際にはもう少し多いかもしれない。

一方、日本の教科書には、少ないプログラム数の中で、できるだけ多くの国や文化について言及しようとしている姿勢がうかがわれる。たとえば、中国の教科書には、具体的な国としてはアメリカ、オランダ程度しか登場しないのに対し、日本の教科書には、アメリカやオーストラリアの他、英語国ではないブラジルも扱われている。また、外国人から見た日本についての話題もある。

表4 国際理解と自国文化理解

「英語」	<i>Sunshine</i>
A Letter to Jane (V-8) [クリスマスについて]	A School in New York (1-13)
Shaking Hands (V-10)	We Look at Japan This Way (1-14)
English is Widely Used (VI-2)	What Does That Mean? (2-2)
A Children's Restaurant (VI-3) [オランダ]	Interesting Things and Places in Australia (2-3)
Schools in the U.S.A (IV-11)	Soccer in Brazil (2-4)
	Roses and Cherry Blossoms (3-2)
	A Blend of Cultures (3-4)

4.3.4 モラルに関するトピック

ボランティア活動や助け合い、共生時代への意識などの価値感や人としてどう行動すべきかに関する題材は、双方の教科書に見られる(表5)。実際、中国の“Cleaning the Street”, *Sunshine*の“A Clean up Campaign”など、よく似ているレッスンもある。

一方、中国の教科書にあって日本にあまり見られない題材は、道徳教育に類するものである。たとえば、中国の教科書には、“Patrick Is Sorry”などと題された、人間関係について、あるいは自分がどう行動すべきかを生徒に考えさせるレッスンがある。*Sunshine*でこれに類するものは、「ひとそれぞれ…」というようなプログラムであろうか。

表5 道徳・教育に関するトピック

「英語」	<i>Sunshine</i>
Wang Wei's Face Turned Red (III-4)	Sea Forest (2-7)
Cleaning the Street (III-15)	A Clean up Campaign (2-8)
What's the Matter (IV-3)	Sharing for Self-Help (3-6)
Patrick Is Sorry (IV-5)	共に生きる (1-付録Reading)
Let's Give Them Three Cheers (II-4)	ひとそれぞれ… (1-11)
Wei Wei Still Got the First Prize (III-2)	
Everybody Must Help to Fight Pollution (VI-1)	

4.3.5 日常生活に関するトピック

*Sunshine*では、日常生活に関するトピックは、意外なことに多くはない(表6)。これは、*Sunshine*では主要な登場人物が生徒と同世代であるため、学校を舞台にする話題が多いせいかもしれない。しかし1年生の後半から、主たる登場人物の久美がアメリカに留学するという設定になっており、そこからは外国の学校生活の様子が登場したりする。

一方、「英語」では、タクシーや地下鉄など、学校以外で展開される話題も少なくないし、日常生活のできるだけ多くの場面を教科書に盛り込もうとしている様子がうかがえる。特に7

年級から8年級の前半あたりにかけては、日常生活で使われる語彙や表現、言葉の機能などを大量に導入しようとしている。短いストーリーやエッセイが中心になるのは、8年級から9年級にかけてで、それまでに一通り日常生活に必要な英語力をつけさせようとしているように思われる。

表6 日常生活に関するトピック

「英語」	Sunshine
Is It Far from Here? (II-8) Taxi Services (II-15) Underground Railways (III-10) At the Supermarket (III-12) Leaving a Message (IV-7) [電話での会話] At the Post Office (V-1) Recreation and Sports (V-7) Smoking is Harmful to Your Health (V-12)	International Phone Call (1-4)

4.3.6 著名な人物

どちらの教科書にも、著名な人物のライフストーリーがいくつか掲載されている。中国の教科書の総レッスン数から考えると、3人というのは少ないと考えるべきなのであろうか。どちらも意外なことに、自国の人物は取り上げていない。しかし、日本の教科書にも過去に中浜万次郎や川原啓美医師などいろいろな人がとりあげられているので、この時期の教科書にはたまたまいなかっただけかもしれない。

表7 教科書で紹介されている著名な人物

「英語」	Sunshine
Do You Know about Edison (3-1) The Wright Brothers (4-4) A Story about Dr. Norman Bethune (6-6)	Konrad Lorenz, a Mother to Birds (2-11) Love Is Action (3-付録Reading)

4.3.7 ショート ストーリー

このジャンルでは、レッスン数の少ない日本の教科書の方が数が多かった。ある程度まとまった英文が読めるようになる2年生の教科書に2つの物語が掲載されている他、3年生の教科書に、復習の課として載せられている。中国のストーリー2つは、かなり短く、それぞれページに半分程度しかない。3年間でたくさんの英文が掲載されているにしては、まとまった分量の物語に取り組むレッスンは実はほとんどないのである。

表8 ショートストーリー

「英語」	<i>Sunshine</i>
The Heron on the Wall (IV-10) Great Friends (IV-13)	A Birthday Present (2-5) Maria Talks about Her Life (2-12) The Wisest Man in the World (3-Review Reading) Something for Joey (3-Review Reading)

5 考察

以上、いくつかの視点から分析の結果を述べてきたが、以下のようにまとめられよう。まず、中国の教科書の方は各学年2冊ずつあり、一見してかなり分量が多い。しかし、本文にあたる部分が多いというよりも、多いのは本文以外の部分、つまりDrillやHomeworkが充実していることが大きな特徴である。このためプリントなどを作成する必要があまりなく、教師には親切な教科書と言えるかもしれない。また、生徒の自学自習にも役に立つことと思われる。一方、日本の教科書は、本文以外の部分はあまりなく、練習問題にあたる分量も、中国に比べて多いとは言えない。つまり、教科書の活用は教師の工夫に任される部分が大きいと思われる。

日常生活の中の身近な題材が多いのは、日本も中国も同じであるが、中国の教科書には、特にまず日常生活で用いられるさまざまな表現や語彙を大量にインプットしようとする傾向がうかがわれる。教科書で描かれている日常生活は学校にとどまらず、乗り物に乗ったり、買い物をしたりと生活のあらゆる側面に及んでいる。一方、日本のレッスンには必ずネイティブ・スピーカーが登場するため、日本人中学生がアメリカで体験する生活が描かれたり、逆に、日本にいる外国人留学生が登場人物となっていることが多く、学校生活を舞台にしていることも多い。中国の教科書は、必ずしもネイティブ・スピーカーを登場させるわけではなく、中国人の生徒同士の学校生活が描かれていることもよくあり、本当は中国語で行われた生徒同士の会話が英語に訳されているという感じを受ける。英語を使用する必然性という意味では、日本の教科書の方が設定に工夫を凝らしていると言ってよいだろう。

また、中国の教科書には、英語の時間にも、道徳的内容が盛り込まれており、教育的配慮が感じられた。

6 むすび

前述したように、英語教育を取り巻く環境が似ている日本と中国では、教科書は中学生にとって唯一の英語との接点であることも少なくない。英語教科書の内容と構成は、学生の英語学習に対しての積極性や、英語教育の方法、効果にも影響を与える。現在、日本では、小学校での英語教育が注目されている。『総合的な学習の時間』を利用して行われる小学校の英語教育では教科書もテストもなく、英語に触れて「楽しむ」ことが目標とわれている。もしそうならば、生徒は中学校で初めて英語の「教科書」と出会うことになる。遊びに近い小学校英語が、中学校で教科書を使った勉強に変わることで、楽しさが失われないようにしなくてはならない。教科書の重要性は今後ますます大きくなっていくと言ってよいであろう。

さらなる英語教科書研究が必要であると思われる。

この論文は、日本教科教育学会第27回全国大会(平成13年11月3・4日福岡教育大学教育学部附属福岡中学校)において行った研究発表に加筆修正したものである。

参考文献

*教科書

中国：九年制義務教育教科書 英語（上海外語教育出版社）七年級第一学期，七年級第二学期，八年級第一学期，八年級第二学期，九年級第一学期，九年級第二学期，（いずれも1994初版1999第7版）

日本：中学校外国語科用教科書 *Sunshine English Course* 1, 2, 3 （平成8年）

伊原巧[信州大学教育学部英語教育研究グループ](1993)「世界の英語教科書分析 第1回 異文化の扱いについて -中国と韓国の場合 (1)-」『現代英語教育』4月号 pp.40-42, 研究社.

森住衛(1992)「英語教育題材論」『現代英語教育』6月号 pp.42-43. 研究社

田中正道(1992)「教科書教材の変遷と現在の教材の特徴」『英語教育』6月号 pp.11-13. 大修館